

第3回

全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

決定

全国同人雑誌振興会・文芸思潮による第三回全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」の公開選考会は、九月五日土曜日山梨県立文学館において山梨文芸協会・山梨日日新聞・山梨県立文学館後援の下に六一名の選考委員、九名の特別選考委員によって行なわれました。

全国からの事前投票者三四名の基礎集計をもとに、候補作「雲の向こうのメモント モリ」梶川洋一郎（安藝文学」75号）・「繭の中」森崎房枝（文学街」253号）・カプセル・タイム」大西亮（北斗」548号）・「どくだみ」波佐間義之（九州文学」524号）・「風景―月壺―」山口馨（渤海」57号）・「ここにおる。」野見山潔子（季刊午前」39号）の六作品について激しい議論が交わされました。

それに基づいた二回の投票の結果、第三回全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」は大西亮氏の「カプセル・タイム」と決定しました。また僅差の次点として、梶川洋一郎氏の「雲の向こうのメモント モリ」と森崎房枝氏の「繭の中」は、特別賞とされました。

またそれぞれ支持者の多かった波佐間義之氏の「どくだみ」・山口馨氏の「風景―月壺―」・野見山潔子氏の「ここにおる。」は優秀賞として賞揚されました（詳細はレポートをお読みください）。

ここに決定とその内容を報告し、受賞作品を賞賛したいと思ひます。

「まほろば賞」受賞作品には、賞状と賞金十万円（蔵野孝治氏・三田村博史氏・山川京子氏・藤田陽子氏・夏目日美子氏からの寄付によるものです）、記念トロフィー、記念品（樋口一葉筆跡額・特別選考委員著書）を贈らせていただきました。特別賞には賞状と賞金三万円・記念トロフィー・記念品を、また優秀賞には賞状と賞金一万円・記念メダルを贈らせていただきました。

今回はどれも力作で、作品の完成度は接近しており、どの作品が受賞してもおかしくない、まれに見る接戦であったと思います。同人雑誌の創作の豊かな結実が見られました。

今後も全国の同人雑誌の中から優れた作品が生まれることを祈願し、たくさんの方の同人雑誌の作品が全国同人雑誌振興会・文芸思潮に寄せられてくることを期待しております。

次回第四回の全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」対象の同人雑誌は二〇〇七年一月一日より二〇〇九年十二月三十一日までの発行の同人雑誌とさせていただきます。奮って御応募ください。

特別賞

「雲の向こうのメモント モリ」

（安藝文学」75号）

梶川洋一郎

「繭の中」

（文学街」253号）

森崎房枝

優秀賞

「どくだみ」

（九州文学」524号）

波佐間義之

「風景―月壺―」

（渤海」57号）

山口 馨

「カプセル・タイム」

（北斗」548号）

大西 亮



まほろば賞決定

全国同人雑誌最優秀賞まほろば賞 受賞のことば

大西 亮

この度は「最優秀賞・まほろば賞」を受賞し、心から喜んでゐる。七七歳の今日まで初めての栄誉である。

五十年前の二十歳のころ、小説を書きかけては挫折を繰り返していた。三十歳を過ぎると仕事（教職）が忙しくなつて現代文学に関心は持つていて読んでいたが、書くほうにまでエネルギーが回らなかった。定年の後、非常勤講師になつて時間と体力に余裕ができて、やつと書き始めた。書いたものは、文芸雑誌の新人賞に応募したが、「文藝界」の第一次選考に通つたことが一回あつただけだった。私は高齢だからはねられたのだと、年齢のせいにした。だが、新人賞と銘打つ以上将来にわたつて書ける可能性が求められるのは当然だろうとあきらめた。

私は生来の性向からか、同人雑誌へはなかなか入会する踏ん切りがつかなかった。だが、七二歳のとき、思い切つて名古屋の同人雑誌「北斗」に加わつて、そこで作品を活字化するようになった。

その第三作目が『カプセル・タイム』である。いったん発表した以上、それについてあれこれ弁解したり、後付けの注釈めいたことは差し控えた

いが、ひとつだけ言わせてもらふならば東京へ行つたとき、貧乏性の私は出費を抑さなくてはカプセル・インを利用したことがあつて、そこで見たカプセルとその利用者の様子にヒントを得たのである。

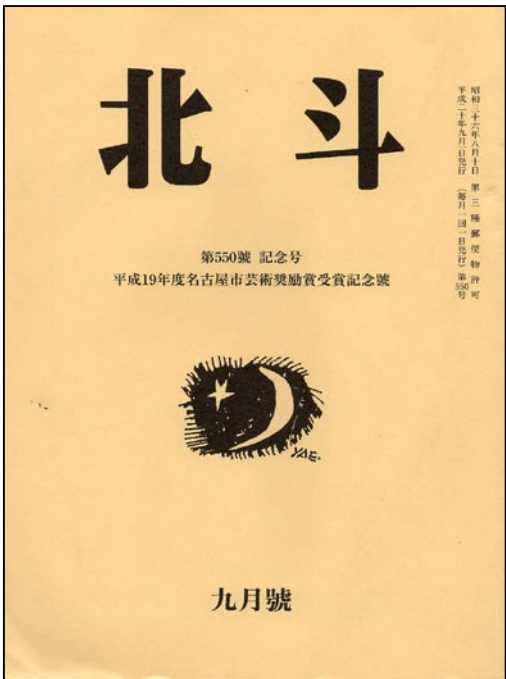
発表するとき、この作品に自信がなく、はじめに弟に読んでもらつて「これはいいと思うよ」との返答を得て「北斗」へ送つた。それ以後、多くの人々に読んでいただけた。就中、「文芸思潮」の五十嵐氏の眼に留まつたことで今回の受賞に至つたわけである。ここに読んでくださった方々に厚くお礼を申し上げます。そして、この受賞を励みにこれからも短篇を中心に発表していくつもりである。



大西 亮

おおにし あきら

1932 名古屋市生まれ
56 三重大学学芸学部（現教育学部）卒業
56～93 三重県公立学校勤務
93～現在まで 公立高校・三重大学・松阪大学短大部・東海学園大学（名古屋）各非常勤講師（図書館学）
所属同人誌 「北斗」（名古屋市）



特別賞 受賞のことば

梶川洋一郎

特別賞 受賞のことば

森崎房枝

今回、「まほろば賞」特別賞に選んで頂き、大変光栄に思っております。立派なトロフィー、賞状等を頂戴し、ありがとうございます。

我が半生をふり返つてみますと、幼少の敗戦混乱期、戦後復興期、高度成長、学園紛争、バブルの崩壊等、巨大なエネルギーに振り回され、今まで来た、というのが偽らざる実感です。己の浅学非才を省みず、その時々で、枯れた川床からいきなり濁水が噴出し、周りを驚かすバターンの繰り返しでしたが、病膏肓に入る、で長い年月が経ちました。下村湖人著「次郎物語」を読み、創作の衝動を覚えました。あれから、もう五十年が過ぎました。この間、幾つか職場、地域で賞を頂戴しましたが、久しぶりに熱中して創作に取り組み、その結果を評価して頂くことは、やはり嬉しいものです。

今回を通じて、世間には苦節四十年、五十年、その道一筋に精進され、真摯に取り組んでおられる方々が如何に多いかを知り、あらためて皆様に尊敬の念を抱いたところです。

今、胸元には、書きたいこと、書くべきことが山積し、筆の遅さに呻吟しております。今後、受賞を励みとして、呂新吾の「年老いたからと言つて嘆くことはない。嘆くべきは、年老いて、何の目的もなく生きていることである」を座右の銘とし、老い知らずで突っ走りたいと考えております。



梶川 洋一郎

かじかわ よういちろう
1940 年生まれ
鳥取県立倉吉東高校卒
警察大学校本科卒
60 広島県巡查
広島警察署長、県本部
外事課長、本部教養課
長を経て
2001 定年退職
現在 広島県遊技業防犯協
力会連合会専務理事
広島市民文芸など小説入選多数



森崎房枝

もりさき ふさえ

1925 広島県呉市生まれ
県立呉高女在学中肋膜炎で休学
44 呉海軍水交社へ勤務
45 罹災、川内村役場へ勤務
被爆者の看護で微熱再発、上京
49 結核性右脇下リンパ腺炎
56 洋裁学院を肺浸潤で退職
59 結婚。
67 腰椎カリエス
75 骨移植手術、アパート経営
2006 一人暮らし
東京都杉並区在住





それがこの選考会の大きな意義だと思っています」と述べられました。

続いて山梨文芸協会会長の白倉一由氏から「小説作品には現代社会の中で生きるということに応える新しさが必要で、それに応える作品を期待したい」というお言葉をいただきました。

さらに山梨文学館前副館長の鬼丸智彦氏からも「山梨文学館も全国の同人雑誌を収集しておりまして、閲覧室でいつでもだれでも自由に見ることが出来ます。またぜひみなさんの同人雑誌をここに寄せてください。公開選考会を通じて全国の同人雑誌の交流がますます行なわれ、いつその同人雑誌の興隆につながっていくことを祈念します」とお祝いの言葉をいただきました。

つづいて、司会から選考のおおまかな流れ、また投票の仕方が説明され、いよいよ選考討議です。特別選考委員は三神弘氏、福岡哲司氏、水木亮氏、都築隆広氏、森啓夫氏、小沢美智恵氏、小浜清志氏、八寛正大氏、五十嵐勉編集長の九人です。

候補作は「雲の向こうのメモント モリ」梶川洋一郎（「安藝文学」75号）・「繭の中」森崎房枝（「文学街」253号）・「カプセル・タイム」大西亮（北



山梨文学館前副館長・鬼丸智彦氏の挨拶



山梨文芸協会会長・白倉一由氏の挨拶

斗」54号）・「ぐくだみ」波佐間義之（「九州文学」524号）・「風景―月壺―」山口馨（「渤海」57号）・「ここにおる。」野見山潔子（「季刊午前」39号）の六作品。

まず、郵送による事前投票では圧倒的な高得点で他を引き離していた「雲の向こうのメモント モリ」から論議に入りました。

●「雲の向こうのメモント モリ」

福岡哲司さんは「私はこの作品をいちばん評価したわけですが、特に作者は終戦のとき四歳だったというところに注目しました。この作者が銀蔵、修平という八十代の人物を通して戦争を振り返っていることにリアリティがある。あのときはみんな



山梨県立文学館

第三回全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」公開選考会は、九月五日午後一時より山梨県立文学館で開催されました。山梨文学館は甲府市の西南のはずれに位置し、樋口一葉原稿及び資料、芥川龍之介原稿、飯田蛇笏資料など貴重な文学資料を保有する近代文学館です。展示規模は全国一を誇る重厚な建物で、六月まで太宰治展も開催されていました。全国から多くの文学ファンが集まる甲信の文学メッカです。フランス絵画で有名なミレーの「種撒く人」「落ち穂拾い」などバルビゾン派の絵も多数保有する山梨県立美術館がその前に建ち、文学や美術の落ち着いた芸術空間を作っています。

晴天に恵まれ、東京、愛知、富山、神奈川、三重、京都をはじめ地元山梨など全国各地から七十一人の選考委員が、山梨文学館に集い、全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」公開選考会の幕開けとなりました。

まず作家集団「塊」小沢美智恵氏の開会の言葉

に続き、五十嵐勉「文芸思潮」編集長の司会にバトンタッチされました。編集長は、主催者の立場から、「まほろば賞」の意図についての短い説明を行いました。現在の同人雑誌をめぐる文学状況を触れながら「文学界」の同人雑誌評が打ち切られたりしているものの、現在は個人から直接社会へつながる新しい時代のコミュニケーションが始まっている。同人雑誌からも直接社会への発信として同人雑誌自らがその優秀作品を取り上げ、選び、共有することによって創造エネルギーを盛り上げ、新しい表現行動をしていこう」と簡単にしかし力強く述べたのち、全国同人雑誌振興会会長・森啓夫氏が挨拶をしました。「回を重ねるたびに参加人数が増えていることはとても喜ばしいことです。同人雑誌自らが優秀作品を選ぶという画期的なことがこれから行われるわけです。自分を貫いて書かれている六篇の優秀な候補作に点数をつけて選ぶということは酷なことではあります。その過程が大事で、過程を大切にしたい。

第3回 全国同人雑誌最優秀賞 まほろば賞 公開選考会 大西亮「カプセル・タイム」が受賞



左から、司会役五十嵐勉「文芸思潮」編集長、特別選考委員の三神弘さん、水木亮さん

つづいて討議は「カプセル・タイム」に入りました。水木亮さんは「題材が面白い。わかりやすく、エピソードが効果的。発想がとてもしなやか。星を見るお姉さんの存在も魅力がある。終わり方も秀逸」と絶賛しました。つづいて都築隆広さんは次のように評しました。「この小説がダントツにいいと思って来ました。主人公がカプ

●「カプセル・タイム」

て立ち直る過程が深く描かれています。執拗なほどの文体ではありますが、このくらいのほうが人間を描く筆は深くなると思います」と評価した。三谷静子さんも「二度、三度読むと、病人の不由な生活のなかでの実感がよく伝わってきて、『繭の中』のほうが心のなかに深く入ってきました」と評した。「山梨ふるさと文庫」の岩崎正吾さんは「純文学の領域が狭められている現代の文学状況の中で、自己存在とは何かという問題を追求していく、純文学の純粹さを守っている作品という点で『繭の中』を評価します。前半寝ていて耳という聴覚だけで開かれている世界から、自分とは何かという問いが深く描かれている。いい作品だと思いました」と述べた。



三谷静子さん

セルをつくっているというだけで相当おもしろいのにお姉さんがドームまでつくっていたりしてさらにおもしろい。カプセルに閉じこもるのは江戸川乱歩の『鏡地獄』を想わせます。次の作品も読みたくなる。ひじょうにユーモラスで愉快な小説を読ませてもらいました」

また、三神弘さんは「社会に馴染めないものを持った家族、親子三人で個人タクシーを経営するというのがおもしろい。家の中にカプセルを置くという息子の発想もおもしろい。おもしろすぎるかなというくらいです。身近で日常的なリアリティを持っている。現代の寓話になっている」と高く評価した。

会場からは古屋久昭さんが「着想が特異。独自性がある。アイデアがある。ラストの鍵番号を忘れて生きるか死ぬかに追い込まれていくところは、現代のパスワード社会の恐怖につながるものがある。記号社会の危険性を暗示しているようにも思える。だれもが認知症になっていく可能性がある現代、このパスワードを忘れる恐怖は普遍的な恐怖につながる。それをこの小説は象徴しているような気がする」と高く評価した。



古屋久昭さん



左から特別選考委員の福岡哲司さん、都築隆広さん、小浜清志さん、小沢美智恵さん

なが戦争に向かっていたじゃないかということを忘れて戦後の平和の上に犯人探しをやっている。戦後の虚偽が浮かび上がってくる。あのとき自分の憲兵という職務に忠実であったことがどうして悪いのか、それを戦後派である作者が書いたというところに大きな価値があると思いました。ただ、異世代を絡ませてもっとスケールが大きくなったと思います」とコメントしました。

小浜清志さんは「私も戦争の被害の大きかった沖縄出身なので、戦争を語り継ごうとするところに意義を覚えた。またそれを書く大きなエネルギーに敬意を払いたい」と評しました。会場からは「インパクトがひじょうに強い。憲兵という側から、広島原爆の心の傷を抉り出したところに、感銘深いものがある」という声も聞かれました。

山中知彦さんは「広島ならではの全人類的なテーマに取り組んだ作品である。軍人として教育を受けた人間の悲しみがよく表現されている。戦争の時代の新たな事実を知ることができた。重要な問題提起をしている優れた作品」と讃えました。何といても原爆を背景にしたストーリー展開には迫力があるというのが、会場全体の感想と窺われました。

●「繭の中」

次に「繭の中」に討議が移りました。小沢美智恵さんは「繭の中」はとてもいい小説だと思いました。出だしもいいですし、病院の中もよく書かれています。寝ている人の感じがよく出ているし、登場人物もみな生き生きとして病人でありながら動いている。絶望というものがよく出ていて、後半になると病人の共感を通してそこからほんとう



笠井忠文さん

に人を愛する方向へ踏み出していくところが深くしみじみと伝わってきて、心に染みるいい小説だと思いました」と批評。五十嵐司会者は「この小説にはその病院に長く入院している病人全体の苦しみや絶望や呻きや嘆きが流れ込んでいる。そこに生きることのリアリティがある。またそこからさくという心の病を持ちながら介護する女性を通して救いの方向へ出て行くところも、感動的である」と評した。

会場からは笠井忠文さんが「私も三年前に腰椎を骨折して入院したが、そのときのことを思い出し、ひじょうによく病人の世界が描かれているし、ご自分の体験から、よくそこから人間とし



小沢美智恵特別選考委員

場する日常の生活を送っている、陰鬱な風貌を持った人たちが登場する。テーマは時間やできごとが交錯する複雑さだと思いますが、この時間の複雑さも人間関係の複雑さもきちんと書かれている。テーマも、月壺に託されたような象徴に高めていくという意図もありますし、対象を持ち得ない現代人の愛とも窺われます。ただ、こういう作品は作者の体験を元にしたということではないはずで、作者によりかかって創作されていくはずですが、そうなる作品の中にいつも作者がいるということになるので、読者はもう少し自由に読ませてもらえないかという、息苦しさも持つ。意図や構成が明快すぎる、あるいは整いすぎているとも言えます。最後は和解ということになりますが、作品の中ではそうではあるけれども読者は果たして十分深呼吸をするように納得を得たかという疑問だと思っています。作品は書き手と読者の間にあって、作品の完成というのは実は読者の側にある。しかしたいへん好意を寄せて読ませていただいた作品です」と支持しました。

五十嵐司会者も「山口さんはこれまでこの『風景』という共通したタイトルでたくさん書かれて



特別選考委員の三神弘さん

いるので、トータルとして評価すべき一面がある。この大きさは別の角度から評価すべき」とコメントし、山口さんに「長編としてはどう見ているか」と質問しました。山口馨さんは「長編という意識はなく、いろんな人間、いろんな世代、いろんな暮らし、いろんな思いを、人間の話をいただいてきて、それにある肉付けをしていきたいという思いが私の中にあります。一作ごとにこめた思いというものがあるわけで、もう一、二作書くとい自分の中になにか生まれてくるかもしれない、とそれを楽しんでいます」と答えてくれました。五十嵐司会者も「女性の作者であるが、男性の書き方が実にうまい。また賞をとっても次に書けない方がたくさんいらっしゃるなかで、常時これだけの作品を安定して書かれる力量は注目すべき」と山口さんがまほろば作家賞に一番近いところにいることを指摘しました。

会場からは「たいへん力のある作品で、書き出しもよい。農村の風景描写にしても草の匂いから始まる描写は優れている。この作者は長編が書けるのではないか。月の光に誘われて親子で絆を深め合う、あるいは月壺という壺を見てお互いの人間を知り合うところなど理想的な形でまと



「風景―月壺―」の作者・山口馨さん



三田文学新人賞作家の佐々木義登さん

最後に「ここにおる。」について議論がまとめられました。名古屋から出席された同人雑誌「弦」の中村賢三さんは「六編のなかで『ここにおる。』が描写力がいちばん優れている。母と娘の絆、死んだ母の影が映されるところ、農村が変貌していく様子、夫の離反などよく描かれています。とても感心しました」と称揚しました。三田文学新人賞作家の佐々木義登さんが「ここにおる。」を強く推奨しました。「私はこの作品を推すつもりで来ました。



特別選考委員の小浜清志さん

●「どくだみ」
四番目の作品「どくだみ」に批評が移りました。小浜清志さんは「途中までとてもよく描かれているが、最後簡単に女性を死なせてしまうのが惜しい」と中上健次との体験を回想しながら論評しました。小浜さんは「カプセル・タイム」の次にこれを買っていたそうです。

駆けつけた特別選考委員の八覚正大さんは、「最初は筋が青春と文学のようなものかなと思いました。カネミ油のことが出てきたところから、社会的な問題に一気にひろがって、それが最後の自殺につながっていくところが、一つの問題をずっしりとあとに残しています。私はこの作品をとて評価しました。カネミ油症二世としてもよく書けていますし、ニキビという青春の象徴が、逆にカネミ油症事件の裏返しであるというところなども衝撃的ですし、それをよく文学として定着させていると思います。よく書けていて、胸に残る小説です。私はこの女性が自殺していいと思いますし、死によって何を残すか、生きた証を人はどう残すかということになれば、この女性が残したものは確かに存在すると思います。またどこにも身寄り



福本安廣さん

がない彼女の骨を最後に引き受ける、引き受けざるを得ないところ、『こういう形でしか愛を表現できないとは残念だが自分の手でしつかりと和江さんを葬ってやろうと思った』というところの前後はすばらしいと思いました」と賞賛しました。五十嵐司会者も、「この作品はカネミ油症事件という社会的な問題が背後にひろがっているの、その被害者の人間存在として社会問題を伴って描かれている文学性は意義があると思います」と評価しました。

会場からも強く推す声が聞かれ、東京の福本安廣さんも「どれもすばらしい作品で甲乙付けがたいのですが、私はなかでもこの『どくだみ』がいちばんいい作品だと思います。それはいま世の中で問題になっている製造物責任がテーマになっているということです。たんにその薬物や有害物によってその人だけが冒されるというだけでなく、子孫にまで影響を及ぼすというひじょうに重い現実がある。この和江さんは自分の死場所を求めている。自分も生を受けたからには、人間として愛を成就して死にたいという思いがあったんでしょ。もちろんそれは許されない愛だったかもしれない。

●「風景―月壺―」

「風景―月壺―」について、批評が移りました。作者の山口馨さんも会場に出席されました。

まず三神弘さんは「完成度の高い作品だけに欠点を探したくなるような損なところがある。今日のような公開審査になるとポイントはそう多くは獲得できない。しかしこういう事実や文体を持った作品がないと、多様な作品のバランスが取れていかないというのも確かです。今日という一日、新しい時間を生きながら、しかし過去の時間が絶えず絡み付いている、過去の人間関係がいつも登

ない。子孫を残すのも問題があるわけで、自分と同じ苦しみを繰り返させるわけにはいかない。そうした葛藤が全編に流れています。ヤギの種付けの話がエピソードとしてありますが、これにはひじょうに深い意味が込められている。ヤギというのは人間に利用されているわけです。家畜として。しかしヤギにも動物の喜びや営みがある。そんなところでも、ふつうの作品には見られない深さがあるのかなと、感銘を受けました。昨今、食品の安全問題もありますけれども、あくまで責任を持たなければいけないという製造責任の問題を人類に警鐘している。最後に散骨という方法で弔うのもこの被害者にふさわしかった。いろいろな意味で考えさせられる作品でした」と激賞した。

浜松から出席された矢部一雄さんも、「どくだみ」を強く推薦しました。「この小説がいちばん読みやすかった。あとの小説は押しつけてくる印象があって閉口気味になるが、『どくだみ』は素直に入ってきた」と「どくだみ」を最も高く評価していました。

心理描写にリアリティがあるところ、蛇のシーンですとか、子鼠を掃除機で吸い取ってしまうところとか、そのあたりの描写は秀逸であって、距離感をくずさずに丁寧に書かれているのには感心しました。最後も、母親がそれとなく出てきて母親の着を身に着けるところで母親の影がずっと寄り添ってくる。そこで『ここにおる。』という言葉がタイトルになると考えました。私は総合的に考えて、このなかでは最優秀であると感じて、強く推したいと思いました」

佐々木さんの発言のあと、一五分の休憩に入り、この間に第一次の投票が行われました。

●第二次選考——決選投票

集計がまとめられて、いよいよ決定の第二次選考です。

集計は「雲の向こうのメメント モリ」二三四・一点、「繭の中」が二一三・五点、「カプセル・タイム」二九五・九点、「どくだみ」一二四・五点、「風景—月壺—」一二〇点、「ここにおる」一四一点で、上位三作「雲の向こうのメメント モリ」、「繭の中」、「カプセル・タイム」が決選選考に残りました。まずトップの得票を得た「カプセル・タイム」について、会場の高校生から感想が求められました。高校一年生の新海満帆さんは「発想が自由な



高校生の新海満帆さん

のと、文章も自由な感じがいい」と述べ、同じく金川沙紀さんは「内側に向いていく主人公の行動が、いまの自分にもあるような気がして、合う感じがしました。ラストもいい」と少ない言葉でコメントしてくれました。

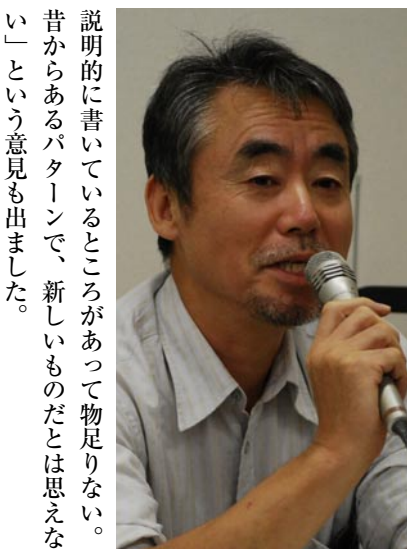
小浜さんは「カプセル・タイム」は簡単に言えば大人の引きこもりですけれども、それは突き詰めていけば孤独で、それが構成的にもきちんとうまく出ていると思いました。最後にうまく収斂していくということで、脱帽という気持ちで最高点を付けさせてもらいました」と論評しました。

会場の坂本かつえさんは「今の時代に出るべくして出てきた作品で、拍手喝采です。この主人公は自閉症でも何でもなくて、今の時代の落とし子だと思います」と激賞。

逆に反対意見も出されました。福岡さんは「読み進めていくと期待が外されていく。ムードでしか書けていないのではないか。この主人公は閉所を好むのか、胎内回帰願望なのか、その点もはっきりしない」と批判しました。

「題材が変わっているのを目を引くが、これが今年の同人誌の最高の作品となると、物足りない。特別賞があればそれにはふさわしいが」という声も会場から出ました。

名古屋の中村さんは「ソ連の戦車がタコ壺を回転して埋め塞ぐというエピソードは違和感がある」と指摘、八覚さんは「説明的で、自意識の部分が追求されていない」と批判しました。また「最後カプセルに閉じこもって内側から鍵をかけるけれども、ダイヤル錠である必要はない。なぜダイヤルなのか。その辺がやや不自然」「知的過ぎて、



選考委員の八覚正大さん

説明的に書いているところがあって物足りない。昔からあるパターンで、新しいものだとは思えない」という意見も出ました。

「雲の向こうのメメント モリ」については宮崎吉宏さんは「スケールの大きい作品」とトップに挙げました。八覚さんは「まほろば賞」に強く推薦されました。「メメント モリは、リメンバー広島なんですよね。そのテーマの重さ、大きさにおいてこれは傑出した作品だと思います。亡くなった妻子が書けていないという欠点はあるにしても、憲兵というなかなか書けない立場から書いている。憲兵だって人間だ、と。船の上での記憶をどう取り戻すのか、メメント モリ、リメンバー広島島の記憶をどう取りもどすのか、取り戻せたら、すごい作品になると思いました。その実存的なものに迫りうる作品です」

逆に岩崎正吾さんは「雲の向こうのメメント モリ」は視点が一定していないところにぐらつきがある。これは「カプセル・タイム」にも言えることだが」とマイナスポイントを指摘されました。「主人公の『ぶった切るぞ』と鍛造に迫ろうとする物言い、軽率ではないか。こういう言動をする者が、被爆者が舟に這い上がろうとするとき、果た

して切ることのためにためらいを見せるのだろうか」という批判も出ました。

最後に「繭の中」について、論評が進みました。八覚さんは「タイトルから自閉的な印象を持って読み始めたのですが、新しさは感じなかったものの、さくという女性が出てくるところからはとてもよく書けているなど感銘を覚えました。実存的な人間の根本に迫っている」と優れた点を挙げました。

福本安廣さんは「人物がとてもよく書けていると思います。病のなかでの人間の描写、重い認識には深淵が覗いています。長く連れ添ってきた家族が、本人の長い病を境に冷たく疎遠になってきたりするそのあたりも、深いものを見せてくれます。文学作品としての深さがある。ただ、主人公のモノローグで『おれ』というのがやや多く出過ぎて耳障りなところもあります。これは作者が女性であるのに、主人公をあえて男性として書いているために生じたのかもかもしれません」と批評しました。

会場の矢崎茂男さんも「人物はとてもよく書けていて、六編の中でこれが一番感銘を深くしました。テーマとしては新しくないので、最も掘り下げられている。傷を負った主人公がさくという女性の真

第3回全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」選考会投票結果

作品名	雲の向こうのメメントモリ	繭の中	カプセル・タイム	どくだみ	風景—月壺—	ここにおる。
事前郵送投票	75.6	8	8.4	4	2.5	5.5
当日選考委員投票	158.5	205.5	289.5	120.5	117.5	135.5
第1回投票合計	234.1	213.5	295.9	124.5	120	141
最終投票合計	281	248	389			

心というか誠実さによって癒されていって生きる希望を抱いていくというのはひじょうに心温まる話で、私はこういう深い感動を与えてくれる作品に魅かれます。またこの小説は完成度がとても高く、主人公が負傷する事故のいきさつについて詳しい説明がないのですが、説明抜きで状況が把握できる



まほろば賞受賞の大西亮さん



優秀賞の賞状を受ける山口馨さん

という筆力も感心しました」と賞賛しました。

最後に五十嵐司会者から「いよいよ最終決定投票ですが、この選考会で全国の同人雑誌の最優秀賞が決定され、ここから全国へ発信されるわけです。この選考会の責任において、悔いのない投票をお願いします」と強調され、決定投票に入りました。

その結果、「雲の向こうのメメント モリ」二八一点、繭の中二四八点、「カプセル・タイム」三八九点と集計され、「カプセル・タイム」が第三回全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」と決定しました。

会場に列席されていた大西亮さんには記念品として、福岡哲司さんの樋口一葉の真跡額、および山梨名産の雨畑硯が贈られました。また山口馨さんには記念メダルなどが贈られました。さらに山口さんには三神弘さんからサイン入り著書・横尾忠則装丁の「三日芝居」がプレゼントされました。会場は拍手に包まれました。

長い、しかし激しい議論の末の決定でしたが、今回はどれが受賞してもおかしくない優れた作品が揃い、充実した文学時間を享受することができました。森啓夫さんが言われたように「結果ではなく、選考のプロセスに意味と価値がある」ことを再認識して、閉会となりました。

明年は、四国の徳島県三好市で十月三十一日に全国同人雑誌フェスティバルのなかでの「まほろば賞」公開選考会で再会することを楽しみにしながら、山梨文学館をあとにしました。(西田宏明)